

- 11 . ああ、朝早くから強い酒を追い求め、
夜をふかして、ぶどう酒をあおっている者たち。
- 12 . 彼らの酒宴には、立て琴と十弦の琴、タンバリンと笛とぶどう酒がある。
彼らは、主のみわざを見向きもせず、御手のなされたことを見もしない。
- 13 . それゆえ、わが民は無知のために捕え移される。
その貴族たちは、飢えた人々。
その群衆は乾きで干からびる。
- 14 . それゆえ、よみは、のどを広げ、口を限りなく開ける。
その威光も、その騒音も、そのどよめきも、そこでの歓声も、よみに落ち込む。
- 15 . こうして人はかがめられ、人間は低くされ、高ぶる者の目も低くされる。
- 16 . しかし、万軍の主は、さばきによって高くなり、聖なる神は正義によって、自ら聖なることを示される。
子羊は自分の牧場にいるように草を食べ、肥えた獣は廃虚にとどまって食をとる。

説教

イザヤは今からおよそ2700年前にユダで活躍した預言者です。

「ユダの王ウジヤ、ヨタム、アハズ、ヒゼキヤの時代」に活動した彼は、

ヒゼキヤ王の宗教改革を助けますが、

その後継者マナセ王の悪政のもとで弾圧を受け、伝承ではのこぎりで引かれて殉教しました。

ウジヤ王時代の大地震、

北王国イスラエルによる侵略、

アッシリヤの侵略といった国家存亡の重大な危機に直面していた時代ですが、

人々は朝早くから酒をあおり、

飲めや歌えのパカ騒ぎに耽って感覚が麻痺し、

神さまのさばきが近づいていることなど知りませんでした。

12節後半： 彼らは、主のみわざを見向きもせず、御手のなされたことを見もしない。

そして、どんなに神さまのさばきを受けても罪を悔い改めないため、

ついにはバビロンに滅ぼされて、国家滅亡、七十年の捕囚生活という憂き目を味わうこととなったのでした。

13 . それゆえ、わが民は無知のために捕え移される。

その貴族たちは、飢えた人々。

その群衆は乾きで干からびる。

14 . それゆえ、よみは、のどを広げ、口を限りなく開ける。

その威光も、その騒音も、そのどよめきも、そこでの歓声も、よみに落ち込む。

飽食の時代、自分の欲と快樂追求に身も心もひたすら熱中する中、

戦争と飢餓という神さまのさばきが迫っているとは夢にも思わぬユダの人々に、神さまはこう宣告なさいます。

13. それゆえ、わが民は無知のために捕え移される。

神さまの恵みに対する無知、神さまのみこころに対する無知の故に、ユダは滅びてしまったのです。

このことは私たちにとっても大きな教訓だと思います。

私たちが自分の私利私欲に耽り、欲と快樂の追求に夢中になっているのは良いけれど、

しかし、私たちにとって最も重要なことを見落としてしまっているのです。

それは、神さまのみこころです。

私たちは、国の利益を追求し、会社の利益を追求し、家庭の利益を追求し、自分自身の利益を追求するけれども、

私たちの人生にとって最も重要な存在は、この天地を造られた神さまの存在です。

私たちの会社にとって最も重要な存在は、この天地を造られた神さまの存在です。

私たちの家庭にとって最も重要な存在は、この天地を造られた神さまの存在です。

ですから、何より神さまを知らなければなりません。

私たちがこの世に造られた神さまを知らなければなりません。

神さまの恵みを知らなければなりません。

神さまのみこころを知らなければなりません。

私たちがこの世に造り、私たちが愛しておられる神さまが、どのように生きて働いておられるか、を知らねばなりません。

「彼らは、主のみわざを見向きもせず、御手のなされたことを見もしない。」ということではいけません。

そして、この神さまから見て、この世界はどうであるか、

神さまは、この世界をどう見ておられるか、

この国をどう見ておられるか、

この職場、家庭、この私の人生をどう見ておられるのかをよくよく考えなければなりません。

それが「歴史」というものです。正しい「歴史観」であります。

ですから、私たちは、まず聖書の教理をよく学ぶことが重要ですし、

それと同時に、この世のことにも積極的に関心を持たなければならないと思います。

私たちキリスト者は、世の情勢に無知無関心ではいけません。

イエスさまは「時のしるし」を見分けるようおっしゃいました。

その時代時代に、私たちキリスト者がどのようにして神さまのみこころをなすべきかを、

まじめに考え、まじめに学び、まじめに祈り、神の栄光をあらわして生きていくべきだと思います。

神さまの目から見て、今何が起きているのか、神さまのみこころはどこにあるのかを知らないまま、

戦時中の教会のように、気がついてみたら、世の流れに流され、国家の言いなりになって、

キリスト者が自分の信仰告白を捨てて神社を参拝し、侵略戦争に積極的に協力して、

神と人の前に罪を犯しているということも、現実であり得るのです。

教会が「無知のために、国家権力に利用されて虜にされた」不幸な事例は、過去数えきれません。

「地上のすべての民族は、あなたによって祝福される。」

神さまの約束をいただいて、

全世界の祝福の中心とされた私たちキリスト者は、この世界に関心を持たなければなりません。

そして、この世に、

この国に、神の栄光をあらわしていくことをまじめに考え、

まじめに祈り、

まじめに神のことばを伝えていかなければなりません。

さて、今日、私たちが直面している大きな課題のひとつは対テロ戦争と「靖国神社」の問題だろうと思います。

この問題が、日本の国家と教会が、

戦時中の失敗をどれほど反省克服しているかを示す、ひとつのパロメータになると思うからです。

そこで、まず「靖国神社」がどういうものであるかについて知らなければならぬと思います。

靖国神社は、正式には、

1862年、安政の大獄以来の弾圧で処刑された尊皇攘夷の志士たちの霊を京都で祀ったことが起源だと言われます。

それから、明治維新があって、明治元年に、

戊辰戦争で「お国のため」戦死した官軍の兵士たちの功績を顕彰するため、江戸城内、今の皇居で大々的に招魂祭を行い、翌年の明治二年に、今の東京九段に招魂場が創設されました。

これが「招魂社」と改められ、1879年に「靖国神社」と改称されます。

靖国神社は、

この後、日清戦争、日露戦争、さらには太平洋戦争に至るまで、

「お国のため」に戦死した戦死者の功績を、延々と勲功・顕彰し続けてきました。

「靖国神社」のユニークさは、この戦死者の「勲功・顕彰」、「戦死者の功績をほめたたえる」というところにあります。

これは、元来日本の信仰にあったことではありません。

明治政府が独自に発明したものです。

明治政府がわざわざ意図的に考えだし、造りだしたのです。

日本古来の民間信仰は「御霊信仰」と言われるもので、

それは「生前の恨みをいだいたまま死んだ人の怨霊が、

疫病をはじめ、もろもろの災いをもたらすものとして恐れられる信仰」で、

その怨霊の活動を鎮めるために「御霊鎮祭」を行いました。

そして、「怨念が強く、祟りがそれほど激しかった霊ならば、祈願もかなえてくれるに違いない。」という風に発展します。

菅原道真を祀った「北野天満宮」などはその例です。

九州に左遷された恨みで、死んだ時に雷が鳴った、だから「火雷天神」として京都の北野天満宮に祀られるというものです。

しかし、戦争で戦死した人たちが「激しい恨みを抱いて死んだ」となると、問題になるんですね。

そんな「無念な」、「怨念を抱かざるを得ない」、空しい嫌な戦争に誰が行きたがりますか？
それで、「お国のために」死んだ兵士が、
「無念な、非業の死を遂げた、哀れな」「御霊」となる、という部分を削って、
彼らの死がすばらしい「栄光の死である」という面だけをひたすら強調して、
死んだ霊は「英霊」とし、「日本の国を守る神」となると強調して、ひたすら戦死者の死をほめたたえるようにしたのです。
これは神道歴史の「歪曲」であると同時に、「捏造」でもあります。
何故なら、そんな「信仰」は、もともと日本の歴史の中にはどこにもなかったからです。
明治政府が勝手に考え出したのです。

いったい、何のためにでしょうか？

日本の国民を、「喜んで」戦争に行かせるためです。
そして、自ら「喜んで」戦争に行き、「お国のために」死なせるためです。
貧しい日本が、
欧米からアジアを開放するという名目で、
アジアの盟主たらんと、
無理な植民地支配と侵略戦争を推し進めていくためには、
「アルカイダ」や「イスラム過激派」並みの玉砕戦法で、戦争に強力に動員して行かなければなりません。
それで「靖国神社」が必要だったのです。
それは、最も**安上がり**に人々を戦争へ動員する、言うなれば「殺人装置」というべきものであります。

政府が本腰入れて靖国神社の思想を国民の間に定着させていこうとするのは、日露戦争以降です。
少なくとも、日清戦争の時は、靖国の「英霊」思想は軍人たちの間にも定着していませんでした。
日清戦争が終わり、戦死者は一万三千二百六十七名で、そのうち86パーセントは病気で死んだ人でした。
通常、靖国神社に祀られる人は「戦死者」であって、
「戦病死者」は不名誉の「犬死に」とみなされたために、合祀されません。
しかし、天皇の憐れみによる「特祀」という形で、後に合祀されることとなります。
そして、その直後に、「日露戦争」を始めるのです。
つまり、たとえ病死とはいえ、それらを「英霊」として合祀してあげないと、
「犬死に」と言われては、兵隊たちは次に迎える「日露戦争」に戦いに喜んで行く気になれません。
だから、無理やり「特祀」したのです。

そして、日露戦争では、日本は多大な犠牲を払いますが、
ロシアから賠償金も取れなかったために、
戦死者と遺族に対して、経済的に補償するすることができませんでした。

このような中で、さらに本格的に、靖国神社での「英霊顕彰」を大々的に推し進めていこうとするのでした。
そして、どんどんと軍国主義に突っ走っていくのです。

ですから、要するに、靖国神社とは、最も安上がりに、（一人あたり二百円で）
人を戦場へと送り出し、喜んで「お国のために死なせる」殺人装置なのです。
国のために死ぬことは良いことだと「教育勅語」で教育して、

実際に「お国のために」死んだら、「靖国神社に祀って」その死をほめたたえて、ほめたたえて、「私たちも、先輩に見習って、同じようにお国のために勇ましく死にましよう。」と教育する中心が、靖国神社なのです。だから、「靖国神社」は別名「戦争神社」、「殺人神社」と言われます。

「お国のため」に戦死した戦死者の「英霊」は、日本の国を守る「神」となって靖国神社に祀られます。

そうになると、日本の全国民が自分を礼拝してくれるのです。

現人神天皇も礼拝してくれます。

「ああ大君のぬかずきたもう栄光の宮、靖国神社」

感謝もされます。

ほめたたえられます。

日本国民の鏡とされます。

日本国民の誇りとされます。

日本国民の模範とされるのです。

生前どんなに行いの悪かった者も、

どんな平民も名もない田舎出身の二等兵も、

「軍神」広瀬中佐といった英雄や北白川宮といった皇族と並んで「神」となることができるのです。

だから、みんな張り切ります。

いのちを賭けて戦います。

そして、玉砕も辞さないのです。

これは最も安上がり国民を戦場に送り出し、安心して喜んで戦死させるための、まさしく「殺人装置」であります。

「靖国神社」は全国の護国神社や忠魂碑といった日本全国に張りめぐらされた巨大なネットワークの頂点に立つものです。

地方の護国神社、その数全国におよそ140、忠魂碑に至ってはもっと多くです。

この「戦争神社」「殺人神社」の存在なくして、あれだけの超法的・狂氣的な戦争動員はありえませんでした。

参拝を拒否した者は国家権力により殺され、

神社を拜んで忠誠を誓った者たちは容赦なく戦争に動員されたのです。

それが「靖国神社」というものです。

私たちが知ろうと知るまいと、これが靖国神社の正体なのです。

それは「戦争神社」であり、「殺人神社」です。

戦時中は軍の管理する軍事機関であったし、

今は我々赤羽聖書教会と同じ「一宗教法人」であるけれども、その基本的な性格は全く変わっていません。

「戦争讃美神社」であり、

「侵略戦争正当化神社」です。

そんな神社に、みなさん、小泉首相が参拝するんですよ。

これはもう、公的・私的は関係ありません。

(赤羽聖書教会のような)一宗教法人の宗教施設で礼拝するのは、全く異質なことです。

なぜなら、靖国神社を参拝するということは、

「あの戦争は間違っていなかった」ということを、

日本の全国民に、そして全世界に向けて、勿論アジアにも告白しているようなものだからです。

戦死者を讃美しているんです。

侵略戦争の戦犯たちを、～それはA級・B級・関係ありません。当時の戦争に協力した全国民もそうですが、「英霊」と呼ばれる人たちは、侵略者であり、日本の国家の犠牲でもあるのです。
でも、そんなことを言ったら、遺族の猛烈な怒りを買います。
そして、右翼の猛攻撃に遭います。
だから、戦死者に対して、「侵略者」と言い切れる人はいません。

しかし、どう考えても、アジア侵略戦争に動員されて戦争に強力したのだから、アジアから見たら「侵略の手先」です。
そして、国家の犠牲です。

なのに、国家は悔い改めて遺族に謝罪しない、
しないから、ただ戦死者をひたすらほめたたえるだけです。

だから、また戦争を始めるしかありません。
反省も悔い改めてもいながら、また戦争の準備をしているのです。

それで、占領時代、
政府は、靖国神社解体して宗教性を無くした国営施設にする道を拒み、
宗教性を維持したまま、一宗教法人として生き延びる道を選びました。

そして、占領政策が終わるや、
遺族会を中心に「靖国神社」を国営化しようという運動がなされるようになります。
そのピークは1969年からおよそ五年間にわたって提出・廃案が繰り返された「靖国法案」です。
靖国神社を国営化して、事実上国家神道を復活させ、それを全国民に礼拝させようという試みです。
衆議院で決議されて、いよいよ参議院でも、という時、
アジアの諸国から批判の声があがって頓挫し、最後は参議院審議未了で廃案となるのでした。

それがダメだとわかると、
政府は今度は首相が靖国神社を公式参拝するという方法で、事実上「国家神道」の道を模索します。
遺族会は、首相が首相という立場で公式参拝することを毎年要求します。
遺族会の要求は、
「日本の最高権力者にして日本国の代表である総理大臣」が、
いわば全国民の代表として靖国の英霊を参拝する、というものです。
ですから、遺族会にとっては、首相がいくら「私的参拝」を繰り返したとしても、それは意味のないことです。
ですから、露骨に「公式参拝」と明言して参拝すると「政教分離の原則」に反して憲法違反になり、
さりとして、「私的参拝」と明言したら遺族会の怒りを買って指示してくれないということで、
毎年「私的」か「公的」か明言しないまま玉虫色で参拝することが、日本の首相の奇妙な毎年の慣わしとなっているのです。

そして、今は、外国のお客さんが来た時に、靖国神社を参拝させる運動をしています。
それは、日本を代表する施設として靖国神社を世界にアピールしようというものです。
靖国神社を日本国の精神的中心にしようとするのです。

靖国神社を国の施設とするためには、当然、宗教性を無くさなければならないのですが、遺族会はそれを無くさない形で、すなわち宗教性を保持しながら国営の施設にしようと、毎年圧力をかけ続けているのです。そして、そんなやりとりをずうっとし続けながら、今日まで来ているのです。

それゆえ、わが民は無知のために捕え移される。 よみは、のどを広げ、口を限りなく開ける。

そのような中で、私たちがなすべきつとめは何でしょうか。

まずは、 知ることです。 学ぶことです。

今何が起きているかを知ることです。

神さまのさばきが大きく口を開けて待っているのを知ることです。

そして、 祈らなければなりません。

この国が悔い改めるよう、祈ることです。

教会が目覚めるよう、祈ることです。

悔い改めるとは、もう二度と同じ失敗を繰り返さないことです。

靖国神社を解体することです。

さもなくば、「無視する」ことです。

国が靖国神社を「無視する」ことです。

国が靖国神社と関わらないことです。

関わる必要ありません。

別段、赤羽聖書教会にテコ入れする必要がないのと同じくらい、靖国神社と関わる必要など全然ありません。

そして、 語ることです。

神のこトバを語ることです。

神のこトバを語ることが、国家に対する教会の責任であり使命です。

教会も、かつて戦時中に犯した罪を悔い改めて、

～つまり、預言者としての責任を果たさず沈黙した罪を悔い改めて、～ 神のこトバを語るのです。

神と人の前に犯した罪を悔い改めるよう語るのです。

そして、もう二度と戦争をしないよう、その準備もしないよう、 語らなければなりません。

靖国神社を解体するよう、さもなくば、靖国神社と関わらないよう、国家に向かって警告しなければなりません。

「神のさばき」と「悔い改め」を宣べ伝えましょう。

これは、正しくは、みこトバを委ねられた私たち教会だけができることです。

教会は全世界の祝福の基です。

神さまは教会を通してこの世界を祝福なさいます。

教会が真理を宣べ伝えないと、この世は神さまのみこころを知ることができずに滅びるだけです。国も滅びます。

全世界の祝福の基として神さまに召されたみなさんが、日本の祝福のため、日本が滅びないために、

預言者として神のこトバを宣べ伝え、この地に神さまの祝福をもたらして行かれるよう、主の御名により祈ります。